１０４「海外旅行の想い出（１）」

私と同年代で海外好きの人は、多分「兼高かおる世界の旅」の影響を受けた人が多いのではないだろうか？まだ海外旅行がごく一部の富裕層のものだった頃、毎週テレビでいろいろな国の文化や風俗を紹介してくれた。私もその一人で、世界のいろいろな国を見てみたいと思っていたが、当時の海外旅行は驚くほど高く、そう簡単に行くことはできなかった。

海外旅行が一般化してきたのは、ちょうど私が大学を卒業して社会人になったころからだったと思う。そのような時期に、自らの収入，自らの意志で海外に行けるようになったことは、とても恵まれていると感じる。そんな時代に後押しされて、今日までに何度となく海外旅行をしてきたが、印象に残っていることを中心に記憶を辿ってまとめておきたいと思う。

（１）スペイン ［１９７５．０８．０８～０８．２０］

初めての海外旅行が実現したのは、社会人になって５年目のことだった。

ラテン音楽やフラメンコが好きだったことから、スペイン語に興味を持ち、お茶の水の某外語学院のスペイン語教室に通い始めた。そこで、１年半ほど経ったころスペインに行こうという話が持ち上がった。既に教室の仲間たちとはすっかり仲良くなり、誰からとなくそんな話が出たのである。

スペイン語の勉強を始めたといっても、その仲間たちとスペインに行くことなど夢にも思っていなかった。しかし、言葉を習っていれば実地に話したくなるのは自然なことだ。実際に行くことになったのは、スペイン語クラスで特に気の合った４名だった。

夏休みを利用しての渡航で、スケジュールは各自少しずつ違っていた。私は、精一杯休みを取って、やっと１３日間だった。他のメンバーはもう少し余裕があったように思う。

初めての海外ということで準備にも力が入った。綿密な事前調査と旅行用品の調達、パスポートは勿論国際免許も取得，またコレラの予防接種も必要だった。

航空券は、パキスタン航空の南回りパリ行き格安チケット、東京→上海→ペキン→ラワルピンディー→カラチ→カイロ→フランクフルト→パリという、今思えば信じられないようなルートだった。飛行距離が長いため、途中給油の寄港地も多く、何と！３５時間もかかった。それでも、初めての海外で給油の寄港も楽しかったのである。

１９７５年８月８日、期待と不安を胸に４人は成田を出発。

パリ到着後、私以外の３名はパリで一泊しパリ見学。私はパリに興味はなく、すぐにスペインに入国しマドリードで一泊、翌日マドリードの街を歩き回り、夜３人と市内のホテルで合流した。

その後は４人で行動、飛行機でセビリア、そこから鉄道・バスで定番の観光地コルドバ，グラナダ，マラガと回った。行きたいところは多かったが、私はそこで時間切れ、マラガで他のメンバーと別れ、単独帰路に着いた。

記憶に残っていることといえば、、、

① マドリードのホテルに着いたのは深夜に近かったが、タブラオ（フラメンコ酒場）「カフェ デ チニータス」に直行。スペイン若手ギタリスト３本指に入る、憧れのビクトル モンへ セラニートの生演奏が聴くことができ目的の一つが達成された。

② マドリードのラス・ベンタス闘牛場で初めて闘牛を観た。入る直前にフリアン・コネーホというマ

ドリード在住の人と知り合った。その彼が教えてくれたのが、闘牛士は日陰で闘うから、入場券は日陰の席がとても高い。太陽が眩しいと闘牛士は光に幻惑され命が危ないためだ。

闘牛が始まるのは日没２時間ほど前、そこで彼は割安の席があるという。始めは陽が当たっているが、次第に日陰になる席である。（これをSol y Sombra[光と陰の席]という）彼は、私の分も買ってくれて、開始ファンファーレ，入場行進から、細かくいろいろと説明してくれた。最初前座から徐々に有名な闘牛士が登場してくる､その頃にはソル・イ・ソンブラの席は日陰になっている。

開始直後の Sol y Sombra 席（牛と闘牛士は向こう側の日陰）

③ マラガから飛行機でパリに着き、帰国便のチェックインで焦った。窓口に行ったのは出発の４～５時間前だったと思う。その頃は予約便のリコンファームが必要だったが、それを知らなかったため予約は取り消されてしまっていた。係員に懸命に頼み込んだが、全く聞き入れられず途方に暮れた。

スケジュール通り帰れなければ、会社にも連絡しなくてはならない。勿論、当時メールなどはなく国際電話するしかない。何度も窓口に行くが「待て」一点張りで埒が明かない。その時は、まさかキャンセル待ちになっているとは思っていなかったが、実際はキャンセル待ち扱いだったのである。キャンセル待ちなら、何度窓口に行っても意味はなく、出発ギリギリまで分からない。後になってやっと合点がいった。結局、何とか滑り込みで乗ることができたのだが、この時ばかりは本当に焦った。もし、その時「キャンセル待ち」と分かっていたら、もっと絶望していたことだろう。

その後の海外旅行でも、リコンファームには苦労することが多かった。しばらくして、往きの便で目的地の空港に着いた時点で、帰りの便のリコンファームするのが最も簡単ということが分かった。一旦入国してしまうと、航空会社のオフィスを探すことは難しいし時間もかかる、電話して英語で話すのもなかなかうまくいかない。その後、利用者からの不評もあり、リコンファームは必要なくなった。

（２）韓国 ［１９８３．０８．１８～０８．２０］

１９８２年、転勤で九州支店勤務となった。福岡から韓国・釜山は至近距離にあり、ちょっととなりの街に行くという感覚で行った。しかし、近いといってもやはり外国、歴史と文化の違いを感じた。

観光客の私に対し、表面的には変わらないように見えたが、過去日本が韓国に対して行ってきた支配の影が根深く残り、決して居心地が良いといえる感じではなかった。

（３）スペイン［１９８４．０４．２７～０５．０６］ ２回目

福岡から大阪、大阪から大韓航空でソウル経由パリに行くのだが、この頃ヨーロッパやアメリカへはアラスカ・アンカレッジ経由だった。当時、ヨーロッパに行くには、ソ連上空を飛ぶシベリアルートが使えず、北極圏を通るルートしかなかったのである。パリ・シャルルドゴール空港に到着後、南方面へのターミナル・オルリー空港までの移動が思いの他大変だった。

パリ→マドリード→アリカンテ→マラガ→アルヘシラス→セウタ→カディス→ヘレス→セビリア→

マドリード→サン・セバスチアンというルートで、スペイン南部を中心に北部まで足を延ばした。

① パリからマドリードへのフライトは、オーバーブッキングのため運よくエア・フランスのファーストクラスに乗せてもらった。ファーストクラスに乗ったのは、後にも先にもこの１回のみ。ファーストクラスは食器から違うのに感激！

② アリカンテは、イベリア半島東海岸に面するスペインで最も気候温暖な街の一つ。空港から市内に向かう途中に見た、鮮やかな青に輝く地中海が強く印象に残っている。

③ マラガから鉄道とバスで、スペイン最南部アルヘシラスに向かう計画だったが、接続が非常に悪く、結局１５０ｋｍの距離をタクシーで行くことに。車は太陽の海岸「コスタ・デル・ソル」を猛スピードで飛ばす。周辺は、オイルダラーのアラビア人たちが土地を買い、別荘を建てているのだそうだ。1時間半ほどすると、ジブラルタル岬が見えて来る。ジブラルタルはイギリス領、そして間もなくアルヘシラスに到着。わざわざアルヘシラスに来たのには大きな目的があった。

パコ・デ・ルシアの生家の前で

フラメンコギターの鬼才、パコ・デ・ルシアの生家を訪ねるためだ。フランシスコ通り６番地の生家まで、タクシーの運転手は何人もの人に道を訊いて探してくれた。

④ せっかくアフリカ大陸が見えるところまで来たのだから、アルヘシラスからジブラルタル海峡を越えアフリカ大陸に渡っておこう。といっても、モロッコに入国するわけではなく、アフリカ大陸にあるスペイン領の飛び地セウタに行ってみた。

フェリア会場正門

⑤ セビリアはちょうど春祭り（フェリア）のシーズンだった。フラメンコ衣装で着飾った老若男女が会場内を闊歩し、カセータ（テントの小屋）で飲んで踊る。私もカセータに招かれフィーノ（ドライシェリー）を勧められた。この時期はちょうど雨のシーズン、雨宿りでカセータに入るたびにフィーノ飲み放題でいい気持ちになった。皆オープンですぐ親しくなる。セビリアーナスの踊りやカスタネットなどを教えてもらい、楽しい時間を過ごした。このフェリアが今回の旅行のハイライトだった。

夢中で写真を撮ったので、途中でフィルムがなくなってしまった。会場内で探すがどこにもなく、ホテルまで取りに戻ってまたカセータに。このころはまだデジタルカメラの普及前だった。

カセータの中でセビリアーナスを踊る

⑥ 行く先々で、手当たり次第にフラメンコのカセットテープを買いあさった。値段が手ごろというこ

ともあったが、６８本も買ってしまい、沢山買いすぎて帰りはバッグを調達して持って帰った。

（４）スペイン[１９８４．１２．２９～０１．０６]　３回目

福岡から空路ソウル、そして再び大韓航空でアンカレッジ経由パリまで。今回は妻と二人でスペインを訪れた。パリ→バルセロナ→セビリア→マドリード→トレド→パンプローナ→イルン→パリというルート。

① パリからバルセロナにはイベリア航空に乗った。バルセロナに着いたのはいいが、預けたバッグがいくら待っても出て来ない。言葉の不自由な外国で、トラブルに巻き込まれると大変。

もし紛失してしまったらどうしよう。荷物が出て来なければ旅行を続けることは難しい、バッグが戻るまで不安は止まらなかった。街を歩いて見て回るが、景色が目に入らない、辛い時間だった。

結局バッグは、バルセロナからマジョルカ島のパルマまで行ってしまったとのこと。バルセロナには昼過ぎに着いたのだが、結局バッグが手元に戻ったのは夜になってからだった。それでも荷物が無事戻って一安心。

② バルセロナから空路グラナダに行く予定にしていた。しかし、何と！グラナダ行きの飛行機に乗り遅れてしまった。仕方なく行く先をセビリアに変更。しかし、この偶然のセビリア行きが、スペインと私の関係をより深くすることになった。

ペペとマリー（夫婦）

ラファエルとマルセーラ（婚約中）

この日は１２月３１日、街は年越しのイベントで華やいだ雰囲気。広場の一郭では、ギターのグループがルンバ・フラメンカをノリノリで歌い、その周りを多くの人が囲んでいる。

このプラザ・ヌエバで、年越しのカウントダウンが行われるというので行ってみた。年越しの瞬間、自分の年の数だけブドウを食べるのだと、偶然知り合った家族が教えてくれ、ブドウを分けてくれた。それがペペ（ホセ・ルイス）とマリー，ラファエルとマルセーラだった。マリーとマルセーラは姉妹。

すぐに打ち解け、カウントダウンの夜をきっかけに親しくなった。夜も更け明け方になり、そのまま彼の家に泊めてもらうことになった。かなり酔っていたので、その後のことは良く覚えていない。

この日以降、家族ぐるみの親交が続いている。

③ スペイン北部の街イルン（サン・セバスチアン）から寝台特急でパリに向かう。その列車で、何と！火災が発生。眠りに入ったころ列車が急停止、一体何が起こったのだろう？皆、列車から降り始めたので、我々も訳も分からず降りた。しばらくして火災ということがわかったのだが、こういう時、言葉が全く分からないのは辛い。大事に至らず、しばらくして列車は再スタートして良かった！

（５）スペイン[４回目]・ポルトガル[１９８６．１２．０５～１２．１６]

１９８６年４月から東京本社勤務となった。勤続１５年の勤年特別休暇[１週間]をもらい、前年８月

に生まれた長男（淳）と家族３人で海外へ。まだ１歳３か月の子供を連れて行くのは少し不安もあった。しかし、サラリーマンには１０日間も休暇を取ることは難しく、せっかくの勤続休暇なので行きたい気持ちが勝った。子供はまだヨチヨチ歩きなので、軽量の組立て式乳母車を用意。これまでとは違い、かなり行動が制約されるのは仕方ない。今回は成田から出発、英国航空でロンドンに入り、その後ポルトガルとスペインを回る。ロンドン→リスボン→サフラ→セビリア→ラス・パルマス→マドリード→ロンドンというルートである。

① リスボンからバスで国境を越え、ポルトガル国境の街バダホスを経由、スペイン西部のサフラを訪れた。ここに来た目的は、有名な国営ホテルに泊まるためである。人気が高く予約が取りにくいため、かなり早くからの予約が必要である。

正式名パラドール・ナシオナル・エルナン・コルテスといい、この地方の領主の城をホテルに改装したもので、独特の外観の建物である。“エルナン・コルテス”は、メキシコ・アステカ帝国の征服者。スペイン西部エストレマドゥーラ地方は、コルテスの他インカ帝国を征服したフランシスコ・ピサロなど何名かの征服者を生み出している。それは、この地方が農業や牧畜に適さない不毛の土地であることと関係が深い。

国営パラドール（エルナン・コルテス）

ホテルは、ラウンジなどパブリック・スペースが広く天井が高い、そして家具など調度品は歴史を感じさせるものが多かった。建物中央にはパティオ（中庭）があり、その中心に噴水がある。

冬のシーズンで暖房が効いて暖かいが、照明が充分でなく薄暗い。スペイン（に限らずヨーロッパ）は、日本人にとって全般的に照明は暗めである。

前から一度泊まってみたいと思っていた、国営パラドールに泊まることができ大満足だった。

② 前回の旅で知り合ったペペの家族に会うため、サフラからバスでセビリアに向かった。これまでに何回か手紙をやり取りし親密になった。

ペペの家は、セビリアから北東に３０ｋｍほど離れたトシーナという小さな町にある。

車でセビリアまで迎えに来てくれ、２年ぶりに再会。ペペには、マリアムとホセ・ルイスという二人の子供があり、淳とよく遊んでくれた。ペペとマリーは、現在小学校低学年の教師、淳を教室に連れて行き、多くの子供たちの仲間に混じって遊んでもらったりした。ペペの家には３泊し、皆旧知のように暖かく接してくれとても楽しい時間を過ごすことができた。

ペペの家の前で

③ 家族がペペの家にお世話になっている間、私だけ単独行動でカナリア諸島（グラン・カナリア島）に行った。カナリア諸島も前から行きたいと思っていたところだ。セビリアから飛行機で３時間あまり、アフリカ・モロッコ沖にあり、スペイン領で常春の７つの島からなる。ここは日本人にとっ

てのハワイのように、北ヨーロッパの人々のハワイともいえる観光地。１２月はピークシーズンで特にドイツ人観光客が多い。乾燥した気候を利用したワインの産地でもあり、ラサローテ島のワインを買ってきた。

（６）スペイン[１９８９．０４．２９～０５．０７]　５回目

今思えば、当時は海外旅行と言えば、スペインにしか興味がなかったのでは？と思うほどスペインばかり目指していた。サラリーマンにとって１週間以上の休みが取れるのは、ゴールデンウイーク，盆休み，正月休みしかなく、中でも年中行事に無関係な、ゴールデンウイークが最も都合が良かった。

言葉の通じない国に行くより、片言でも話せて意思疎通ができる方が楽しい。それと、移動しながら泊まり歩くより、現地友人の家を基点として各地を回る方が、より血の通った旅のように感じる。

今回はセビリアを中心に、その近郊とスペイン南西部を回る。

アエロフロートでモスクワからマドリード→セビリア，セビリア近郊，アルコス・デ・ラ・フロンテーラ，ヘレス，アヤモンテ，コルドバなど。

① 連休中は航空運賃の値段が急激にアップする。そんな中、少しでも安いチケットということでアエロフロートにした。アジア系キャリアだと、ヨーロッパの主要都市（パリ，ロンドン，フランクフルト，アムステルダムなど）への便で行き、その後ヨーロッパ系のキャリアに乗り換えてマドリードやバルセロナに入ることになる。接続便が同じキャリアなら問題ないが、キャリアが違うと大幅な時間遅れなどで乗り逃がす可能性もあり厄介だ。それと、大都市には空港が複数あり、接続便が違う空港ということもある。例えばパリの場合、シャルル・ド・ゴール空港に着きスペイン方面はオルリー空港出発がほとんどである。

前回はオフシーズンということもあり英国航空にしたが、今回はゴールデンウイーク中で値段を優先した。アエロフロートは、サービスや乗り心地の点であまり評判が良くなかったが、それは承知の上だ。アエロはモスクワからマドリードの便があるので、乗り継ぎを心配する必要はない。

ただ、マドリード便の接続は悪く、なかなか予定通りいかず、モスクワでの一泊を余儀なくされた。ホテルはモスクワ・シェレメチェボ空港の近くの森の中にある質素なホテルだった。

② コムニオン・レリヒオーサという宗教上の行事があった。

８歳になった子供たちのための宗教的な儀式とのこと。近親者あるいは友人か？みんな正装している。礼拝終了後パーティがあり参加させてもらった。近くの町や村から多くの人々が集まり、食べ飲み、歌い踊る楽しいパーティだった。

ペペから紹介され、いっぺんに顔見知りになった。Manolo(マノーロ), Manuel(マヌエル), Amparo(アンパーロ), Chiquitin(チキティン), Rocio(ロシーオ), Pastora(パストーラ) Maria(マリーア), Fran(フラン), Exequier(エセキエル), Maria(マリア) Angeles(アンヘレス), Jose(ホセ) Manuel(マヌエル),、、、など。男はマノーロ，女はマリアがとても多い。語尾「O」が男，「A」が女なので分かりやすいが、愛称で呼んだりするので混乱しとても覚えきれない。例えば、ホセはペペ、マヌエルはマノーロが愛称。

記憶に残っているのは、

【エセキエル】メロン農家､イタリアやドイツに輸出、子供はマヌエル・マリア（男）、ロシーオ（女）
【マノーロ】ペペと同じく先生、近くに住んでいる
【チキティン】大男、エセキエルの畑で働いている、近くの村 カンティジャーナに住む
【マノーロ】エセキエルの兄、アスパラガスを輸出。箱詰め工場を見学させてくれた。東京に持って行けと、白アスパラを箱一杯詰めてくれたが、持って帰れるわけはなくペペの家で食べた。

【アンパーロ】カスタネットの名手らしい、フェリアになるとセビリアにカセータ（小屋）を開く

③ ペペの家に泊まりながら、アンダルシア白壁の街の一つアルコス・デ・ラ・フロンテーラ、ポルトガル国境の街アヤモンテ、コルドバなどに日帰りで行った。ペペを通じて必要な情報が集められとても有り難かった。

ポルトガル国境の街アヤモンテ、川の向こうはポルトガル

（7）スペイン［１９９０．０４．２８～０５．０６］ ６回目

今回もアエロフロートで行くことになった。ゴールデンウイークは予約が取りにくいし値段も高い。それでも行くとなれば、サラリーマンにとってこの時期だし航空会社も限定される。

今回は、東京→モスクワ→ミラノ→マドリード→セビリア→バルセロナ→ジュネーブ→チューリッヒ→モスクワ→東京　というルートである。

往きはイタリア経由、帰りはスイス経由に決めた。東京→モスクワの往復航空運賃に加え、ヨーロッパ内の移動は全て正規運賃で思いのほか費用がかかった。

① アエロフロートで行くヨーロッパは２度目のことなので不安はなかったのだが､､､

昨年は、モスクワ空港に到着し、ゲート２で待つように言われたが迎えのバスは来なかった。結局そのまま空港ビルの中で一夜を過ごした。翌朝、マドリードに行く二人だけ、空港のすぐ近くのホテルに案内された。マドリード便の出発が夜だったためだ。アエロフロートは、時々このようなトラブルがあるので敬遠される。今回、またそうなっても仕方ないとあきらめかけたが、その必要はなかった。

ホテルは昨年と違い、かなりモスクワ市内に入ったところにあり、わずかながら市内の様子を見ることができた。部屋のカギをもらうまでが一苦労。団体客が優先で、ロシア語のできるツアコンのいるグ

ループが断然有利、個人旅行者は最後になってしまった。部屋はドミトリー形式で昨年より新しかった。
明日の早朝、ミラノに向けて出発する。

② ミラノからセビリアに行くのに、マドリード経由，バルセロナ経由どちらにするか？料金はバルセロナ経由の方が安いと思ったが、マドリード経由も同じだったので、接続がよいマドリード経由に決めた。マドリードからペペの家に電話したが応答がなく、セビリア市内のマリーの母の家に電話。

住所を教えられ、空港からそこに来て欲しいとのことだった。迎えがないと、セビリアからトシーナのペペの家まで自力で行くことはできない。ペペと落ち合えるだろうか？

セビリアに着くと、珍しく雨が降っていた。予期していなかったが、ペペの家族（マリーと子供マリアム）が迎えに来てくれていて一安心。１年ぶりの再会。

③ フェリア（春祭り）の最終日、夕方５時から闘牛があるという。セビリアに見に行くのかと思ったら、テレビで見るのだった。近くの町カンティジャーナ出身の闘牛士マニーリが、最初に出てくるということで応援するようだ。ペペの説明を聞きながら真剣に闘牛を見た。

まず、誰もいない闘牛場に牛が放たれる。牛は興奮状態で、場内を走ったり時々止まったり落ち着かなく動く。その牛の獰猛さや勢いを見て、観客はこれから始まる闘いに期待を膨らませる。

カポーテ（黄色／ピンク色の布）を手にした数名の闘牛士（助手）が牛をあしらい、動きや癖など習性を見極める。次に、馬に乗り槍を持ったピカドールが牛の首を突き、少しずつ牛を追い詰めていく。馬が目隠ししているのは、恐怖で逃げ出さないようにするため。腹に防具を付けているのは、牛の角に腹を突かれて馬の内臓が飛び出ないようにするためだ。この時点の牛はまだ勢いがあり、ピカドールが馬ごと持ち上げられて倒され、ハッとする場面があった。

次にバンデリジェーロ（銛うち士）の出番。牛の注意を引きながら、真正面から近づき２本の銛を背中に打ち込み瞬間身をかわす。３名のバンデリジェーロがそれぞれ２本ずつ刺し、合計６本の銛が背中で揺れる。この頃になると牛は出血で徐々に弱まり、いよいよマタドール（いわゆる闘牛士）が登場。ムレータ（赤い布）で牛をコントロールしながら、角を胸スレスレのところを通過させるなど華麗な技を披露、最後に牛を仕留める。

最初にマドリードで見たときと比べ、牛が放たれてから、ピカドール，バンデリジェーロ，マタドールの技など比較的機械的に進むという感じ。やはり４００kg もある牛と闘うのは並大抵の精神力ではないとは思う。もし、牛が少しでも首を曲げ角が引っかかれば、闘牛士は風に舞う木の葉のように空中を舞い、大ケガしたり場合によっては命を落とすこともある。開始前の闘牛士の表情が画面にアップで映されたが、緊張の極にあるように見えた。

スペイン伝統の闘牛だが、一頭の牛に何人もの闘牛士が寄ってたかって、最後に殺してしまう。やはり日本人からすると残酷な見世物という印象が強い。でも“残酷”も国や人々によって感じ方が違うし、まして伝統行事ということを考えれば、とやかく言うのは適切でない。

ペペの家族と

④ 往復するだけで３日もかかるスペイン旅行は、一週間＋α程度の休みではあっという間に終わってしまう。それでも当時は、休みになるとスペインに行きたかった。

それは、４回目以降ペペの家に泊まりながら、近郊の町を巡るという滞在型になったことで、より地元の人々と深く触れ合うことができるようになったからだ。ペペの知人などとも顔なじみになり、意思疎通ができるようになると、話題が広がり話すことが楽しい。そのため、多くの時間をトシーナで過ごしたが、一度だけトシーナから百数十キロ離れたロンダに行ってきた。ロンダは、セビリアとマラガの中間あたりにある断崖絶壁の街。ロンダに生まれたフランシシコ・ロメロが近代闘牛のスタイルを確立したことで、闘牛発祥の街とも呼ばれている。また、フラメンコの形式で「ロンデーニャ」といえば、自由なリズムと独特の響きで、ちょうどロンダの深い谷に共鳴するような印象深い曲調である。

崖の街ロンダ

⑤ アエロフロートのマドリード～モスクワは便数が少なく、フライトの関係で、来るときはミラノ経由，帰りはチューリッヒ経由だった。その結果、スペインに入る前にミラノ観光，帰りはバルセロナ経由でチューリッヒに行くことにし、バルセロナで一泊、ガウディの建物などを観て歩いた。

バルセロナからは国際列車でフランス・プロバンス地方を通りスイスに入った。ジュネーブからさらに進みローザンヌで一泊、翌日チューリッヒまで長い列車の旅をした。

（８）南米［１９９２．１１．２７～１２．１４］

１９９２年２月大阪支店勤務となった。２，３月は単身赴任期間で、京都の独身寮から大阪に通勤。４月に入り、新学期とともに西宮市の社宅に入居、家族との新しい生活がスタートした。

この年４月で入社２０年経過し、２週間の勤年特別休暇を取ることができる。勤特休の規定が変わり、前回までは入社１５年経過で１週間，２５年で２週間だった。それが、１０年経過で１週間，２０年で２週間になったのである。私個人としては、前回から５年で２週間の休暇が取れることになった。しかし、新任地で１年も経たず、２週間の長期休暇を取るのは大変。極力支障なさそうな期間を選び、事前に充分スケジュール調整，根回しを行った。有り難かったのは、勤特休は社員の権利という考え方が行き渡っていて、みな協力的だったことだ。

せっかくの２週間、目一杯膨らませ１８日間で初の南米を目指した。行き帰りに４～５日必要なので、実質的には２週間しかない。何度も行くことができない南米である、どのように回れば効率的か、いろいろなルートを検討した結果決めたルートは、

大阪→（サンフランシスコ）→マイアミ→リオデジャネイロ→（サンパウロ）→フォス・ド・イグアス→アスンシオン→ブエノスアイレス→プエルト・モン→サンチアゴ→ラパス→（サンタクルス）→（パナマ）→サンホセ→（サンフランシスコ）→大阪

１８日間でこれだけ行くのだから、かなり欲張ったスケジュールである。今考えれば、自分でも随分無理したものだと思う。このルートのポイント（ネック）は、パラグアイのアスンシオンが入っていること。パラグアイは有名な観光地が少なく、観光ルートから外れているので飛行機の便が少ない。それでも、何とかして一度は行ってみたい国であり、今回の旅行に含めたのである。

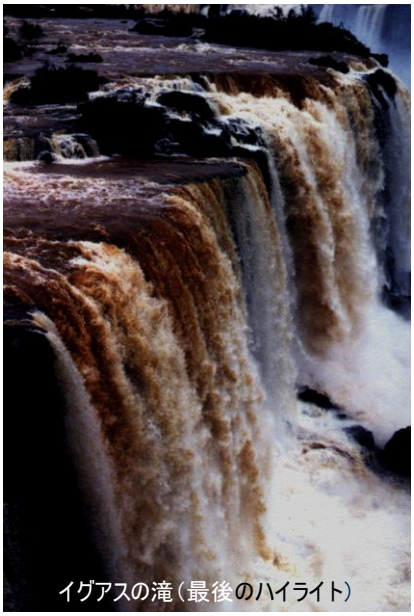
① やはりリオデジャネイロ、コルコバードの丘からとパウン・ジ・アスーカルから見た景色の美しさは強く印象に残っている。

パウン ジ アスーカルからの眺め

② リオから飛行機でサンパウロを経由し、フォス・ド・イグアス空港へ。ここは「イグアスの滝」のブラジル側最寄り空港である。今日はイグアスの滝を観て、パラグアイのアスンシオンまで行く予定。今日、飛行機の便はなく陸路で行くしかない。事前調査では、ここからパラグアイ方面に行くバスがあるはずだが、想像していたのと全く違うローカル空港で案内所も何もない。

ここに来るほとんどの人の目的は、イグアスの滝を観ることである。そして、その多くの人がレンタカーで観光するようだ。レンタカー係員に聞くと、バスは夜遅くにならないとないという。数人に聞いてみるが本当のことは良く分からない。どうもタクシーで行くしかなさそうだ。

ここからアスンシオンまでは３５０ｋｍ、東京から名古屋の距離である。交通事情の悪いブラジルの地方を陸路で行けると考えたのが甘かった。タクシーと値段交渉、初め３００ドルから値切って２５０ドルで決定。イグアスの滝の観光をして、その後アスンシオンに行ってもらう。この国の物価から２５０ドルは破格の値段だと思うが、東京から名古屋までタクシーで行こうとするとこの何倍もかかるだろうと自分を納得させる。


イグアスの滝（最後のハイライト）

イグアスの滝は想像していたよりはるかに迫力があった。この時期は雨季にあたり水量が多く、轟音も凄く大満足だった。

いよいよパラグアイに向けて出発。車は猛スピードで西に向けて進む。しかし、ブラジル・パラグアイ国境で車の大渋滞、国境越えに１時間もかかった。亜熱帯の夏にエアコンなしの車中１時間は辛い。太陽を正面に見ながら、ひたすら時速１００ｋｍで走る。走っても走っても道は真っ直ぐ続いている。道の両側はのどかな田園風景。牛の放牧、点在する粗末な民家、時々人の姿も見える。途中、イタグアという小さな町で小休止。ここは、ニャンドゥティという「クモの巣」のようなインディオの織物で有名なところだ。

アスンシオンに近づくにつれて次第に日が暮れて暗くなり、目的のホテル・グアラニに着いた時は、日がとっぷりと暮れていた。

③ ブエノスアイレスでは、研修生として会社に招かれ同じ部署に所属していた、日系２世（Ｋさん）のご両親にお世話になった。Ｋさんが、私に便宜を図るよう連絡してくれていたのである。

ハイヤー運転経験のある知人に頼んでくれ、市内観光とラ・プラタ市博物館を、娘のご主人には夜のブエノスアイレスとタンゴのナマ演奏が聴ける「エル・ビエホ・アルマセン」を案内してもらい、観光旅行ではできない貴重な経験をさせていただいた。空港の送り迎え、ホテルの手配・支払いなど、至れり尽くせり本当にお世話になった。

その後、Ｋさんは日本人女性と結婚、友人を招いて行われたアルゼンチン式披露宴では、私たち

夫婦が立ち会人を務めるという親しい間柄である。

③ サンチアゴの中央市場（メルカード セントラル）でのこと。

魚料理を食べ終えトイレに行った。そこで偶然マノーロという若者に遭ったのが事の始まり。親しげに近づいてきて、おごるから一緒に飲もうという。６歳の子供がいっしょだった。行くとテーブルには他に仲間が２人、リカルドとベルナルドというおじさんだった。

３人と話しながら、ピスコ（日本なら焼酎）のコーク割を飲んだ。既に３人はかなり酔っていた。メロンやアイスクリームを食べ、ピスコのコーク割を何杯か飲んでいると、マノーロが俺の家に来いという。３人連れだし子供も一緒なので、マァ危険はないだろうと付いて行った。

タクシーで１０分くらい走っただろうか、だんだん郊外の汚らしい住宅街に入っていくのでちょっと不安。途中で車を降り、古ボケた建物の一杯飲み屋に入り、またピスコを注文して飲み始めた。焼肉とトマトを挟んだサンドイッチ（シュラスコ）が来た。勧められ、食べないわけにはいかない。調理場や食器などの衛生状態が心配で、とても味わって食べるという感じではなかった。

その店に３０分ほどいてやっと出発。着いたところはマノーロの弟夫婦の家だった。そこでまたピスコのコーク割。飲んで話して楽しい時間だった。休みに突然来て、弟は迷惑だったに違いない。このあたりは、底辺で働く人々の住宅地のようだ。砂ぼこりが多く衛生状態も良くない。

肝炎の不安もあったが心配すればきりがなく、変な病気になったら運が悪かったと諦めるしかない。自分の体力と幸運を信じて食べることにした。

外の空気を吸って家に戻ると、どうしたことだろう、マノーロは自分の家に帰ってしまったという。人を誘っておいて弟の家に連れてきて、さっさと自分だけ帰ってしまうとは何とも無責任な奴だ。私は勿論マノーロの家がどこにあるか知らない、仕方ないのでリカルドの家に行くことにして、ベルナルドとはここで別れた。リカルドの家は、奥さんと２人の子供がいた。長男は中学生くらい、次男はまだ５歳ほど。とってもかわいい子で、奥さんは教育ママのようだった。

いろいろ話したと思うが、何を話したのか、どのくらい時間がたったのか良く覚えていない。リカルドはまだ飲み足りないらしく、誘われ再び２人で夜の街に繰り出すことになった。タクシーでまた中心街に戻り店を探す。このころになると２人ともフラフラ。リカルドは早足でどんどん歩いて先に行ってしまう。ずいぶん歩いて探すがよい店が見つからず、結局あきらめそのままタクシーでホテルまで送ってもらいリカルドと別れた。

サンチアゴの下町の人々の生活の一端を見ることができて楽しかったのだが、危険でもある。見ず知らずの人に付いて行くと、万が一ということも無いとは言えないし、運が悪ければ酔ったスキに身ぐるみ剥がされてしまうこともありうる。今日の人たちは良い人で良かった！

④ ボリビアのラパスは世界で最も高いところにある首都、ほぼ富士山と同じ標高である。夜ホテルに着くとすぐにペーニャ（フォルクローレを聴かせるレストラン）に急ぐ。早足で歩くと少し呼吸が苦しい。問題になるほどではないが、アルコールの飲みすぎと走ったりするのは禁物。ペーニャで

はいろいろなスタイルのグループが登場して、迫力満点の本場フォルクローレの生演奏を堪能した。

演奏を聴いている時はそれほど感じなかったが、明日のことを考え早く寝ようとしても、どうしても眠れない。首が痛いのと、気圧のせいか次第に頭痛が酷くなってきた。眠ろうとすればするほど眠れず、結局ほとんど一睡もできずに一夜が明けた。ホテルの外は明け方まで騒がしかった。

頭痛と吐き気で気分は最悪。ホテルの人にコカティーを飲むと治るといわれ、近くの喫茶店に入る。カップに注いだ熱いお湯に、乾燥したコカの葉っぱが何枚か浮いている。これを飲めばすぐ効くと思ったが、ほとんど変わらなかった。

それでも７時にはチチカカ湖に行くためバスに乗らなくてはならない。日数に余裕がないので、スケジュールを変更するわけには行かない。頭痛と寝不足で朦朧とした気分の中、体を引きずって何とかコパカバーナ行きのマイクロバスに乗った。

チチカカ湖とコパカバーナ村遠景

念願のチチカカ湖をこの目で見ることができたのだが、もっと体調のいい時に見たかった。

翌日の午後、コスタリカに向けて出発。まだ吐き気がひどく、体調は相変わらず良くない。ところがラパスを飛び立ってサンタクルスに降りたとたん、頭痛も吐き気もどこかにいってしまった。

満足に食事をしていないことと、睡眠不足もあって元気はないが気分は悪くない。あれだけ悪かった気分が、標高の低いサンタクルスに着いたらウソのように治ってしまった。

（９）シンガポール［１９９３．０７．２２～０７．２５］

家族４人パックツアーでシンガポールに行った。ショッピング，インド・レストラン，飲茶料理，アニマル・ショー，巨大仏像，植物園など定番の観光ツアーを家族で楽しんだ。残念なことにこの時、マーライオンは改修中だった。

（１０）世界一周 前半［１９９３．０８．０７～０８．１３］

旅行雑誌か何かで、世界一周航空券というのがあることを知った。

現在も勿論あると思うが、最新ルールは当時と変わっているかも知れない。当時のルールは次のようだった。世界一周航空券は、ＡＰＥＸ（Advanced Purchece Excursion Fare／事前購入制回遊運賃）といい、正規の特別運賃で航空会社のカウンターで直接購入できる。

・有効期間は１年間
・出発１４日前までに、ルートと最初の区間の予約を入れて発券、それ以外はオープンでよい
・日本発はなく海外発のみ。ただし、発券は日本の航空会社，旅行会社でできる
・ルートは自由だが、東周りか西周りかを決めて一定方向に地球を一周、逆行はできない
・世界一周航空券の多くは、航空会社２，３社の協力で発行される

従って、自分の行きたいところに強力なネットワークを持つ航空会社を選んでルートを決めるのが良い。航空会社によって細かいルールがあるので個別に注意が必要。

今回、私はシンガポール航空（ＳＱ），デルタ航空（ＤＬ），スイス航空（ＳＲ）に決め、インド発世

界一周航空券で計画を立てた。まずインドから日本までを使い、次の休みに日本からアメリカ周りヨーロッパ、インドを経由して日本に戻って来る。

インド発を選んだ理由は、発券国通貨建てで割安だからだ。ビジネスクラスで７７，０００ルピー（当時のレートで２９万円）。エコノミークラスは香港発もインド発とほとんど変わらないが、ビジネスクラスとなるとインド発が断然安い。別に、日本からインドまでの航空券が必要になるのは言うまでもない。サラリーマンの休暇は限られ、有効期間が長い航空券のメリットを生かした使い方が難しいのは少し残念。今回、出発地をマドラスに決め、大阪からバンコク経由でカルカッタ、そこからマドラスに入ることにした。現在、インドの地名は、カルカッタ→コルカタ，マドラス→チェンナイ，ボンベイ→ムンバイであるが、ここでは旧呼称を用いる。

大阪→[タイ航空]→バンコク→[インディアン航空]→カルカッタ→[インディアン航空]→マドラス→→[シンガポール航空]→シンガポール→[シンガポール航空]→東京というルートである。

① バンコクでは、ワット・プラケオ（エメラルド寺院），ワットポー（涅槃寺）を見学し、ドリアンを食べた。日本人にとって、タイの街は居心地よく楽しい。

ワット・プラケオ（エメラルド寺院）

② バンコクを飛び立って２時間半、西ベンガルのデルタ地帯が見えて来る。広大な湿地帯の上空をしばらく飛び、やがて椰子の木に覆われた大都会カルカッタが見えてくる。

カルカッタ空港は全くコンピューター化されておらず、すべて手書き手計算。マドラス行きの航空券を買うだけなのに、ホテルの名前とかベジタリアンかノンベジかまでいちいち詳しく調べる。

空港から市内までの道路はスコールで水浸し、どの道も人であふれている。小雨に濡れながらリクシャー（人力車）が行く。市内に入ると溢れるような人を掻き分けながら、クラクションを鳴らして車が進む。旧市街ばかりを通って来たせいか道路は狭く、想像を上回る汚く非衛生的な街だ。

これがいわゆるナマのインドの第一印象。いよいよインドに来たという実感が沸いてきた。気温は３４，５度、湿度はほとんど１００％だろう。手からじっとり汗がにじみ出る。

カルカッタ市内

ホテルから外に出て、水浸しの道をゆっくり歩く。事前にコレラ，チフス，肝炎，マラリアなど恐ろしい病気についての知識を得たせいか、過敏症になり最初は食べ物を口にするのも抵抗があった。

若者がインドを旅して、そのまま居着いてしまうのを“沈没”というそうだ。何でもありのインド、慣れるにしたがって居心地が良くなるのは分からなくもない。

カルカッタでは、ポルシュナート・テンプル（ジャイナ教寺院），ダールシネシュワール・テンプル（ヒンドゥー教寺院），ナコーダ・モスク（イスラム教寺院），カーリーガート（カルカッタ最大のヒ

ンドゥ教ー寺院）などに行った。カーリーガートはカーリー女神を祭った寺院である。カーリー神は、赤い舌を出し生首を持って踊り、血の生け贄を求める気味悪い神だ。

このカーリーガートで、観光客を狙った自称最高カーストの僧に引っかかり、大金をだまし取られそうになったが、何とか難を逃れることができた。思いだすのも忌まわしい経験だった。

③ マドラスは南インド最大の都市、タミルナードゥ州の州都、タミル人の土地だ。心なしかアーリア人と比べ温和な顔に見える。

マドラスはカルカッタに比べて、都市インフラが整備されている。空港から市内への道路はハイウエイ灯が点いて明るく、時々信号もある。インドで初めて見る信号機。カルカッタは雨季だったが、マドラスはまだ雨季ではない。ここも雨季になるとカルカッタのようになってしまうのだろうか？

マドラスでは、現地ツアーに加わりヒンドゥー教寺院巡りをした。インド各地から集まった観光客に交じって、一人だけ日本人の私が加わった状態。説明は現地語（ヒンディー語）だから私にはさっぱり解らない。時々隣席の、アーンドラ プラデーシュ州から来たという人に教えてもらった。ツアコンも私は言葉が解らないので、英語で集合時間を教えてくれた。

ツアーはマハーバリプラムの海岸寺院，カーンチープラムの２つのヒンドゥー寺院を回る。ヒンドゥー寺院では靴を脱いで裸足で入るのだが、異教徒は本堂には入れない。寺院の柱は１つの岩から掘り出された全て異なる彫刻で、その精緻さは全く驚嘆に値する。別の寺院では、太鼓と笛（ソプラノサックスに似た音）の幻想的な音楽が流れていた。太鼓も笛もアドリブのメロディーを奏で澄みきった音色、それに音響効果抜群で荘厳な雰囲気だった。途中、小さなレストランで昼食をとった。３種類のカレー（野菜・マメ・ポテト）がターリーに盛られ、米とチャパーティーを食べる。自分だけスプーンをくれという訳にはいかず、水道で手を良く洗って、初めて右手を使って食事をした。ここまで来るともう悪い菌が体に入ってきても仕方ないという気持になる。私の前に座って食べているインド人を見ていると、指先を巧みに使って実に器用に食べている。カレーと米を混ぜちょうどいい硬さに保ちながら、手で固めて口の中に放り込む感じ。米を３分の１くらい残しておいてラッシー（ヨーグルト）をかけて、ドロドロになったのを最後に食べる。私にはこれはどうしてもできな

ﾀﾞｰﾙｼﾈｼｭﾜｰﾙﾃﾝﾌﾟﾙ（ﾋﾝﾄﾞｩｰ教寺院）

ﾎﾟﾙｼｭﾅｰﾄﾃﾝﾌﾟﾙ（ｼﾞｬｲﾅ教寺院）

海岸寺院

かった。

④ テレビは「インドの恋物語」といった映画を放送している。映画で描かれているのは、ほんの一握りの上流階級。それに比べて、下層階級の人々の極端すぎるほどの貧富の差はどうだろう。

現在、カースト制度は公にはないことになっているが、実際はまだまだ根強く残っている。カーストによって自分の職業が決められてしまうことについて、多くの人が何の疑問も持たないのが不思議である。そもそもカースト制度とは、ヨーロッパ系のアーリア人が北インドに侵入し、先住民で褐色膚のドラヴィダ人を支配するために築き上げた身分制度である。

南インドやスリランカは、北インドを追われたドラヴィダ人が多く住む地域で、当然異なった文化を持ち、言葉はヒンディー語でなくタミル語を話す。同じインド人でもアーリア人は商魂たくましい抜け目のない人、一方ドラヴィダ人は辛抱強く温和な人というイメージ。

以前テレビで、カーストの枠から外され、人間扱いされない「不可触民」の話を見たことがあった。触れただけ、あるいは目にしただけでも穢れるものとして差別されている人々の存在である。

ガンディーは彼らをハリジャン（神の子）と呼んで、その地位向上に努めた。征服民と被征服民の問題は単純なものではないが、一日も早く彼らに差別のない平和な社会の来ることを願わずにいられない。

⑤ 総括するとインドは面白かった。最初、あまりの汚さ・非衛生さに辟易したが、慣れるに従って耐えられるようになってきた。考えてみるとインドが特別なのか、日本が特別なのか分からなくなってくる。日本はあまりにも効率主義、サービス優先主義なのではないか。世界の現状をみると、このインドの非効率さ非衛生さがそれほど特殊とは思えない。むしろインドの方が世界レベルからしたら一般的なのではないかという気もする。

マドラス→シンガポール，シンガポール→東京は、シンガポール航空（ＳＱ）のビジネスクラス（ラッフルズクラス）に搭乗した。ＳＱのビジネスクラスはサービスの良いことで有名である。

チェックインはスムース，搭乗まで専用ラウンジで寛ぐことができる。座席シート，搭乗直後のシャンパン，食事は勿論、食前・食後の飲み物も自由に選べるなど至れり尽くせりのサービスだった。

（１１）スペイン［１９９３．１２．２５～０１．０３］　７回目

今年は海外熱がかなり高く、私にとって３度目の海外旅行となる。

冬休みを利用して、家族４人でスペインに行った。

今回は 大阪 → 東京 → ブリュッセル → マラガ →(バス) グラナダ →(バス) セビリア →(バス) マラガ
→ ブリュッセル → 東京 → 大阪 というルートである。

これまでは、まずマドリードに入り、そこから飛行機か新幹線でセビリアに向かうことが多かった。しかし、今回選んだサベナ・ベルギー航空は、ブリュッセルからマラガへの便があるので、直接マラガに飛ぶことにした。まずブリュッセルに到着。翌日の便までのわずかな時間だったが、ブリュッセルの街を散策することができた。小便小僧は改修中で水は出てなかった。

マラガからはバスでグラナダに向かった。今回のスペイン旅行で観光と言えるのは、冬のアルハンブラ宮殿を観たくらいである。その後、バスでセビリアに移動し、あとはほとんどトシーナで過ごした。

スペイン国内はバスのネットワークが整備され、主要都市間の移動にはバスが最も便利である。

① ホセの家族の夕食に招待された。ホセは、３年前に妻と子供２人だけでトシーナに滞在した時に知

り合った家族である。ホセのところは三姉妹で、長女はホセにそっくり。近所の知り合いも集まり、和気藹々楽しい夕食のひと時を過ごした。

ホセの家族と夕食

② ペペとマリー，先生のマノーロ夫妻，ペペの知人のセバスチアン夫妻，私と妻の８名で、３０ｋｍほど離れたカルモーナに行った。カルモーナはローマ人が築いた町で、旧市街の丘の上には有名なパラドールがある。このパラドールは、イスラム様式を取り入れた石造りの重厚な建物である。

以前、サフラで泊まったパラドールよりずっと大きく、１００人以上宿泊できる。セバスチアンは知識，教養がありドイツ語も話す。そのパラドールでお茶を飲んで、しばらく話して帰ってきた。

③ ペペの知り合いが大勢集まって年越しのパーティが行われた。毎年行う年越しの恒例行事らしい。みんな正装して教会に行き、その後年越しパーティになる。

ペペ，マリー，マリアム（ペペの長女）とアントニオ（ペペの次男），マノーロ夫婦と子供２人，エセキエル，その奥さんのマリアと子供３人，メルセデス，メルセデスの長女とその婚約者など、大人も子供も関係なく、食べて飲んで踊って賑やかなパーティだった。地域の親しい人々が集まって楽しく過ごす年越しもいいなぁーと思った。

年越しパーティ

（１２）世界一周 後半［１９９４．０４．２９～０５．０８］

前回、世界一周前半は、インドから東京まで来た。

今回はゴールデンウイーク期間中に、東京から東周りでインドまで行けば世界一周となる。ただ、世界の主だった国々を回るわけではないので、世界一周というより地球一周の旅と言った方がふさわしいだろう。たった１０日間しかないので、世界一周航空券のルールに従い、できるだけ効率的にルートとスケジュールを決めなければならない。

そして決めたルートは、東京→ロサンゼルス→メキシコシティ→アトランタ→チューリッヒ→ローマ→チューリッヒ→ボンベイ→ホンコン→東京　である。

今回は大阪空港からでなく、成田空港からの出発となってしまった。大阪→成田の予約が取れず、新幹線で東京に入り、さらに成田空港まで何と！5 時間もかかった。

ゴールデンウイーク初日とあって成田空港はかなりの混雑。シンガポール航空のカウンターのエコノミークラスは行列が出来ていたが、ラッフルズクラスは空いていてすばやくチェックインできた。

シンガポール航空ロサンゼルス便は期待どおりのサービスだった。搭乗直後からドリンクサービス、アペリティフの後のフルコースの食事で大満足。隣席のシンガポール人は土木の電気技師で、バハ　カ

リフォルニア湾の仕事で出張とのことだった。日本の会社で働いたことがあるらしく、ある程度日本の建設会社のことも知っていた。とっても人の良いおじさん風の紳士で親切にしてくれた。

つい先日、中華航空の事故で２００人以上の人が亡くなったが、このフライトは全く不安の無い安全なフライトだった。

① ロサンゼルスは、シンガポール航空のアメリカ路線の到着地である。ロサンゼルスでは滞在時間が４時間ほどしかなく、ハリウッドをブラリとしただけだった。空港シャトルバスが着いたチャイニーズシアター前から、ハリウッド大通をグルッと大きく一周して戻ってきた。ハリウッド大通りの両側は、いかにもハリウッドといった派手な店が何軒も並び、見ていて飽きない。ハリウッド大通からサンセット大通りに行ってみるが店はなく、チャイニーズシアターに戻りタイムアップとなった。

チャイニーズシアター

② ロサンゼルスから、次の目的地メキシコシティは国内線扱いだった。パスポート コントロールはデルタ航空のチェックインカウンターで簡単に終わり、外国に行くという感じはしない。

残念だったのは、ロサンゼルス→メキシコシティ間は、ファーストクラスとエコノミークラスのみ、チケットはビジネスクラスでもエコノミークラスに格下げされてしまったことだ。

メキシコシティには深夜に着いた。空港に近づき徐々に高度が下がると、巨大な明かりの群が見え、想像以上に大きい街ということが分かった。３時間半のフライトだった。

翌日朝から行動開始、まずテオティウァカンに行き、強い陽射しの照りつける中、太陽のピラミッドと月のピラミッドに登った。石段が大きく、一段一段が結構大変。

テオティウアカン全景（中央は石の参道[死者の道]）

次に、シウダデーラ市場から繁華街ソナ・ローサに行き昼食。そして、時間的にどうか？と思ったが、今回いかなければ行くことはないだろうと思い、南の外れにあるソチミルコに行くことにした。

ソチミルコは、派手な飾り付けをした舟で運河を遊覧する有名な観光地。到着すると、周辺は巨大野外マーケット状態、ニワトリ，ヒヨコ，小鳥，サボテンの葉（何に使うんだろう），ありとあらゆる野菜、果物が道に並べられ活気がある。小さめのランチャ（小舟）を選び、運河に漕ぎ出す。中央運河に入ると幅は広く、たくさんのランチャがいる。マリンバ・バンドの舟を近くに呼び寄せ、盛りあがっているグループがいる。

ソチミルコの舟遊び

訊くと、運河の全長は１２０ｋｍもあり、ランチャの数は２０００もあるという。普通３時間くらいかけてゆったり周るが、それでは日が暮れてしまうので１時間くらいで回ってもらった。

メキシコシティは地下鉄網が発達し、市内の移動はほとんど地下鉄で可能。しかも地下鉄は料金が安いので有り難い。

ホテルに戻り一休みして夜８時半頃、マリアッチを聴きにガリバルディ広場に行った。多くの人が集まり、たくさんのバンドが客を相手に演奏している。広場を囲むようにレストラン，カフェテリア，バー，ディスコ風など多くの店がある。角のカフェテリア風の店に入り、ビールを１本飲んだところで２人組のギターが回ってきた。周りの雰囲気から、私がリクエストをする番のようだ。

１曲目、La Barca（ラ・バルカ／小舟）をリクエスト。やれるかな？と思っていると Como No！（勿論できるよ）、１，２分キー合わせをし、歌詞を確認して演奏開始。レキント・ギターが例の調子で前奏を奏で歌が始まった。きちんと３番まで歌ったのはさすが！ロス・トレス・カバジェーロスの雰囲気が出ていてとても良かった。私の後ろに座っているアメリカ人グループも大喝采。

次は El Reroj（エル・レロー／時計を止めて）か？と２曲目の催促、カバジェーロスならラ・バルカよりエル・レローの方が断然有名。でも次のリクエストは La Ultima Noche（ラ・ウルティマ・ノーチェ／最後の夜）を頼んだ。この曲も納得の歌と演奏、周りも喜ばしてくれ、やはりプロだ！と感心した。

③ アトランタ空港に到着、４時間しかないので市内に行くことは難しい。免税店でアトランタの土産を見ていると、アトランタ・ブレーブスの野球関係、ゴルフのマスターズや映画「風と共に去りぬ」の写真やＴシャツ、あとは農産物のタマネギとかジャムなどバラエティがあって面白い。

間違えて国内線のコンコースに入ってしまった。Ａ～Ｄのコンコースをつなぐのは、未来都市にあるようなシャトルトレイン。車内のアナウンスは、ＳＦ映画に出てくるようなディジタル音声。

飛行機から空港ターミナル行きのバスは、油圧で飛行機の扉のレベルまでバスの車体をアップし、直接飛行機から乗り移ることができるようにしているのは驚いた。バスが足を伸ばすという表現がピッタリくる。乗客は少し移動するだけで、あとは全部バスがやってくれる。さすがデルタ航空のハブ、全米第２位の輸送量を誇るアトランタ空港は近代装備が整っていた。

コンコースを間違えたお陰で、ＳＦに出て来る乗り物に乗った気分を味わった。この空港は国際線より、圧倒的に国内線の面積の占める割合が多い。アトランタ空港は、とにかく巨大な空港という印象だった。

④ 今日から明日にかけて、３回乗り換えを行う飛行機乗りづめの一日になる。

大西洋を越えてヨーロッパに入り、パリの南側を過ぎスイスに入る。目に鮮やかな緑の畑が続き、適度な湿度の豊かな土地と感じる。はるか右遠方にはアルプス山脈が連なって見える。

太陽に輝く山の姿に見惚れている間に、チューリッヒ空港に到着。チューリッヒでのトランジットの間、ビジネスクラスのラウンジを利用することができた。ラウンジの窓からは雪山が望め、最高の景色。ウイスキーを飲みながら、ゆったりとぜいたくな時間を過ごす。あぁ、ヨーロッパに着いたな！と実感。

アルプスを越えるともうイタリア。緑の田園地帯を抜け、海岸線が見えてくる。飛行機は海岸線に沿ってずっと南下して行く。この景色は最高にきれいだった。空から見る景色で最も美しいのは海岸線の見える時ではないだろうか。ローマ空港は海岸の近くにあることがわかった。シンガポー

ル航空に負けず劣らず、スイス航空のサービスもとても素晴らしかった。

⑤ ローマではサンピエトロ寺院，コロッセオ，フォロロマーノ，ヴェネツィア広場，パンテオン，ナヴォーナ広場，スペイン広場，トレヴィの泉など定番の観光スポットを観て回った。

コロッセオは、巨大すぎて離れないと標準レンズのカメラには収まらない。今から２０００年も前に、５万人収容の巨大ドームが作られていたのは、ただ驚くばかりだ。今この風化が何とも言えずいい。そして、ナヴォーナ広場では忘れられないアクシデントがあった。

噴水の端に座って、横に荷物を置いて地図を広げて見ていると、突然オートバイに乗った男が近づいてきて、バッグをひったくっていこうとした。一瞬の間で、たまたまバッグの持ち手が短く掴みにくかったため、オートバイに乗りながらではうまく取れなかった。私はとっさに“アッと”声を出した。盗るのに失敗してそのままオートバイは走り去っていった。

周りにパラパラと人はいたが、あまり気づいていないふうだった。現金とトラベラーズチェック、それと大切な航空券を盗られるところだった。今思えば、３，４０m離れたところで、私の様子をうかがっているのを、自分でも無意識には気づいていた。私がバッグにカメラを入れたのを見て、それを狙ったのだと思う。バッグの中には、もっと大切なもの「航空券」が入っていたのである。これを盗られてしまっては、旅行を中止しなければならない。いや、それより日本に帰れなくなってしまう。ヤレヤレ、本当に危ないところだった！

ナヴォーナ広場

⑥ チューリッヒは、リマト川の両側に発達した美しく落ち着いた街である。

リマト川をチューリッヒ湖の方に下り、湖の根もとの所まで来る。雨は止む気配が無く意地悪く降り続いている。さっきから気になっていたケーブルカーに乗って丘の上に行ってみたが、チューリッヒ大学とチューリッヒ工科大学があるだけで他に何もなかった。まだ雨は止みそうもなく思うように動きがとれず、近くのスーパーで買い物をしてホテルに戻る。ホテルの部屋でラジオを聴くと、イタリア語の放送でフランスの歌、チューリッヒはドイツ語圏でレストランのおばさんでも３～４カ国語を話すというお国柄である。人々は穏やかで知的、落ち着きがあってとても感じのいい街という印象。

⑦ チューリッヒから飛行時間７時間半でボンベイに到着。搭乗したスイス航空ＳＲ１７０便ビジネスクラスは、最高といってよいサービスだった。ウイスキー飲み放題、チーズ食べ放題。食事も文句なし。隣のスイス人ビジネスマンはよく食べよく飲む。最初から最後まで飲んで食べていた。

深夜１１時半に到着、空港建物を出るとムッとした生暖かい空気が全身を包む。ものすごい湿度と暑さで汗が噴き出る。空港を出たタクシーは、人気のない道路を走るとすぐに街らしい地域に入った。

道路のいたる所で人が寝たり、話し合ったりしている。このような光景が延々と続く。おびただしい数の人が、道路の両側で何をするでもなく時間をつぶしている不思議な光景だった。

翌日、世界一周航空券はここまでなので、ボンベイから日本に帰るチケットを買わなければならない。エアインディアのオフィスで、ボンベイ→ホンコン→大阪のチケットをカードで買うだけで１時間近くもかかった。事務処理は非常に遅い。次は、キャセイ航空のオフィスで予約のリコンファームだ。タージマハルホテルの中にあるオフィスで手続きをした。これは簡単にできたが、ホンコン→大阪がエアインディアのチケットになっていたので、キャセイにエンドースする必要があるとのこと。

最初から全部キャセイにしておけば良かったのに失敗。タクシーでエアインディアのオフィスからこのキャセイのオフォスまで来て、またまたタクシーに乗ってエアインディアのオフィスまで逆戻りだ。何という無駄な時間！エアインディアのオフィスは事務処理が極端に遅く、たったこれだけのために２時間以上もかかってしまった。

ボンベイでは、インド門，プリンスオブウエールズ博物館、半島の対岸にあるマラバールヒル，クロフォード・マーケットなどを観た。

プリンスオブウエールズ博物館はコレクションの数が凄い！自然科学，動物，古美術，陶器，仏教美術，楽器，織物，日本の浮世絵や古伊万里まである。中でも群を抜いているのは、夥しい数の細密画のコレクションで圧巻だった。丘の上から眺める浜辺の景色が美しい。対岸のタージマハルホテルを中心とする高層ビル群がはるか彼方に見え素晴らしい景色。

クロフォード・マーケットは、果物の集荷場のような市場で人と熱気に圧倒される。自称ガイドがしつこくつきまとうので、だいたい様子が分かったところで出てきた。次にカージィ・インダストリーという物産店で土産をみて、ブラブラホテルに帰ってきた。ボンベイはカルカッタやマドラスに比べて市内にタクシーが多く、リクシャーやオートリクシャーが少ないことに気付いた。それにしてもこの暑さは何とかならないものか。

クロフォードマーケット

この街はどこもかしこも人また人。いたる所で商売しているという感じ。ただ、カルカッタやマドラスよりは、少し落ち着いた街のように思う。汗を流しながらボンベイの街を回り、だいたい街の中心部の輪郭もわかりかけてきた。ボンベイは本当に人口の多い都市という印象。

⑧ ボンベイからホンコンはエアインディア、ホンコンから大阪まではキャセイ航空で帰ってきた。
ホンコンのホテルで、世界一周最後の夜をゆったりと過ごした。
時間に追われ慌ただしかったが、やりたいことはほぼできたので満足できる世界一周旅行だった。

１０日間という非常に短い期間にもかかわらず、自分としては比較的リラックスして心の余裕が持てた旅だったと思う。

（１３）ホンコン［１９９４．１２．０８～１２．１１］

家族揃って３泊４日のパックツアーでホンコンに行った。タイガーバーム・ガーデン、ビクトリアピークなどの観光スポット巡り、ショッピングやホンコン料理などを家族で楽しんだ。

（１４）バンコク［１９９５．０３．１７～０３．２０］

連休を利用して、バンコク往復格安航空券でバンコクに行ってみた。

バンコクは、世界一周旅行の前半で初めて訪れ１日滞在した。食べ物が口に合い、物価も安く居心地よかったので、いつかゆっくり来たいと思っていた。海鮮料理が手頃な値段で食べられ、特にカニが目当てだった。上海ガニのようなカニで、とても味が濃く大好物になった。

（２０２１．０４．２７）